『古今和歌六帖』出典未詳歌の表現

――古今・後撰歌との関連を中心に――

西山秀人

一

歌数約四五〇〇首を有する浩瀚な類題和歌集『古今和歌六帖』（以下「六帖」と略称）の成立については、これまで貞元元年（九七六）を上限とする説が広く行われてきた。しかしながら、六帖所載歌の表現分析がようやく本格化しつつある昨今、六帖の根幹部分が天徳年間（九五七～九六一）にはほぼ纏められていたとみる近藤みゆき氏[1]の御論や、該集所載歌の一部に後撰集編纂時に梨壺に持ち込まれた和歌資料が含まれている可能性を提示した拙論[2]などにより、六帖の成立事情に関して、より具体的な見通しが立てられるようになってきた。

六帖の原態ともいうべき和歌資料が天徳頃には確かに存在し、源順ら当代歌人たちの間で徐々に流布しつつあったとする見方は、表現レベルの推論であることを考慮しても、それなりの蓋然性を持つものといってよい。ことに、集中一〇〇〇首を優に超える出典未詳歌をめぐって、順が早い段階で意欲的な表現摂取を試みていると目される点は、六帖の成立事情を考える上できわめて示唆的な問題を提起してもいよう。六帖出典未詳歌の存在は、これとほぼ同歌数を有する万葉異伝歌とともに、六帖の表現特性、ひいては六帖の原態を想定する上できわめて有力な手がかりになるかと思う。そこで、本稿では六帖出典未詳歌の歌風的特質を探るべく、まずは古今集・後撰集所載歌との表現的関連について考察を及ぼしてみたい。

なお、六帖の掲出本文は宮内庁書陵部蔵五〇一・三四本（桂宮旧蔵本）を底本とする『新編国歌大観』に拠った。[3]

二

はじめに六帖出典未詳歌について、その認定基準や各帖ごとの採歌状況といった基礎的諸問題を整理しておく必要があろう。

自明のことながら、出典未詳歌の認定に際しては他文献とのかかわりにおいて種々の問題が浮上してくる。調査あるいは処理の方法いかんによって未詳歌の数は若干動くことになろうが、本稿では六帖の成立時期を、ひとまず通説に倣い貞元元年（九七六）～永延二年（九八七）と推定した上で、次の二項に合致する歌を出典未詳歌として扱うことにした。

(1) 万葉・古今・後撰の三集には不載で、他に出典が知られない歌。

（例）

389はるかぜは花のなきまに吹きはてねさきなば思ひなくてみるべく（六帖・一・春の風／拾遺・雑春1035・不知）

(2) 先行の歌集に存しながらも、明らかに後世の増補と見なされ、他に出典が知られない歌。

（例）

3173あさなあさなけづればいとどみだれつつわがくろかみのとけぬこころを（六帖・五・髪）

あさな〳〵けづればいとゞみだれつゝ我黒髪のとけぬ比哉（躬恒集Ⅱ299・乍入撰集漏家集・新拾遺集）

調査にあたっては、石塚龍麿『校證古今歌六帖』(4)および山本明清『古今和歌六帖標注』(5)を参酌しつつ、『新編国歌大観』CD－ROM版・『私家集大成』により検索を行ったが、両テキストには不載の異本歌や歌謡等についても可能な限り確認するようつとめた。ただし、夫木抄・歌枕名寄等に存する六帖拾遺歌は考察の対象外とした。また、認定に際しては慎重な検討を余儀なくされる事例も多いが、本論では出典未詳歌の内実にいち早く立ち入るべく、きわめて便宜的な処理を施した場合がある。

たとえば、(1)ではまず万葉歌との歌句類似歌をめぐって異伝歌か否かの判断が問われるところである。本論では中西進氏『古今六帖の万葉歌』（昭39　武蔵野書院）を参酌し、同書が万葉該当歌と認定した歌は出典未詳歌としてカウントしないという方針をとることにした。また、万葉歌以外の類似歌もその処理が難しく、例を挙げると、

616鶯のはかぜをさむみ春日野の霞の衣いまやたつらん（一・霞／続後撰・春上17・不知）

鶯の羽風を寒み春日山霞の衣今朝はたつかも（宇津保物語・春日詣）

710かきくらしふる白雪のしたもえにきみうせねとや人のつれなき（一・雪）

かきくらしふる白雪のしたぎえにきえて物思ふころにもあるかな（古今・恋二566・忠岑）

864夏ごろもうたしめやまのほととぎす鳴く声しげく成りまさるなり（二・山）

なつごろもうたしめやまのほとゝぎすいまはきとよみたちかへりなけ（家持集Ⅰ84）

夏なればふかくさやまのほととぎすなくこゑしげくなりまさるなり（亭子院歌合・解題／拾遺・夏123・不知）

1684いつとてか我がこひざらんみちのくのあさかのぬまはけぶりたゆとも（三・沼）

いつとてかわがこひざらんちはやぶるあさまの山のけぶりたゆとも（貫之集Ⅰ656／六帖・二・煙790）

のように異伝・訛伝か否かの判断に迷うものが少なくない。616を例にとると、標注は「続後春上よみ人しらず」の記載のみであるのに対し、校證は「うつほ物語梅花笠七丁三句かすか山けさはたつらん続後撰春上題しらすよみ人不知五句今はたつらん」と注し、616と宇津保所載歌を同一歌と見なしている。もともとは同じ歌で、六帖が宇津保から採歌した、あるいは宇津保が六帖所載歌を利用したとみることもできようが、一方が他方の歌句を一部改変して詠まれた影響歌である可能性もあろう。とくに宇津保歌は三句が「春日野」ではなく「春日山」である点、

鶯之（ウグヒスノ）　春成良思（ハルニナルラシ）　春日山（カスガヤマ）　霞棚引（カスミタナビク）　夜目見侶（ヨメニミレドモ）

（万葉・巻十・春雑歌1845）

と表現的に親しさを見せ、六帖歌とは趣向性をやや異にしている。本論ではひとまず別歌と見なしておきたい。他歌についてもこれと同様の措置をとることとし、たとえ句表現は近しくても一首の主想や表現趣向が異なる場合は、同一歌とは見なさず出典未詳歌としてカウントした。なお、古今集異本歌との共通歌[6]については、いずれもその典拠を見いだし得ないが、本稿では他の古今集所載歌と同列に扱うこととし、出典未詳歌からは除外した。後撰集異本歌との共通歌は管見に及ぶ限りでは探せない。

(2)の場合はまず六帖とほぼ同時期の成立とされる人麿集・家持集所載歌の扱いが問題となろう。たとえば、

519 ことにのみあふとはいひてくらはしのみねのしら雲たつ（ママ）たひにけり（一・雲・人麿／人麿集Ⅲ676）

533 さほ山にたなびく雲のたゆたひは思ふ心をいまぞさだむる（一・雲・人麿／人麿集Ⅱ206Ⅲ212）

2698 かささぎのはねにしもふりさむきよをひとりやわがねん君まちかねて（五・独り寝・人麿／人麿集Ⅱ381Ⅲ553）

3091 のちつひにあはずもなりねいもをおきてつまはさだめじこひてしぬとも（五・わぎもこ・人麿／人麿集Ⅲ496）

3421 あづさゆみひきはりもちてゆるさずとわがおもふいもはしるやしらずや（五・弓・人麿／人麿集Ⅱ361）

3425 かくこひんものとしりせばあづさゆみするゑのなかごろあひみてましを（五・弓・人麿／人麿集Ⅱ380Ⅲ588）

4211 さくらばなこづたひちらすうぐひすのうつし心もわがおもはなくに（六・桜・人麿／人麿集Ⅱ26Ⅲ228）

4357 あやしくもきなかぬかりかしら露のおきにしあさほひさしきものを（六・雁・「人麿三首」／人麿集Ⅱ150Ⅲ178）

などは、あるいは家集側が六帖から採歌したかと疑いたくもなるが、本論ではこれらをひとまず先行歌と見なし、該集との共通歌は伝本の区別なく調査の対象外とした。また、後世の付加とみられる素性集増補歌群や伊勢集に含まれる古歌集群との共通歌[7]についても、歌群または歌集部分が六帖成立以前より流布していた可能性を鑑み、対象から除外した。

以上のように出典未詳歌の認定に際しては種々の問題が山積してはいるが、上記(1)・(2)の判断基準によりひとまず出典未詳歌数を算出してみると次表のごとくとなる。

出典未詳歌数

帖	六帖歌数	出典未詳歌数	割合（%）
一	828	157	19.0
二	623	192	30.8
三	520	205	39.4
四	554	139	25.1
五	1020	268	26.3
六	954	180	18.9
計	4499	1141	25.4

＊出典未詳歌数は重出歌を含めたものである。

ちなみに、校證の他文献注記（「未考」「家集になし」などの記載も含む）をもとに上記の基準により出典未詳歌数を算出すると計一二八三首、田林義信氏の注記[8]によれば計一二一五首となる。もっとも、校證は拾遺歌を増補していることもあって総歌数は若干異なる

が、一応の目安とはなろう。

各帖ごとに見ていくと、出典未詳歌数が他を圧して多いのは第五帖である。その理由については所載歌そのものの多さもあろうが、たとえば、同帖が六帖中最多の三九六首[9]もの万葉歌を収めていることなどを勘案すると、同帖の性格も微妙にからんでこよう。むろん、出典未詳歌と万葉歌とを同列に扱うことはできないが、興味深い現象ではある。一方、歌数が最も少ないのは第四帖であるが、未詳歌数一三九首のうちには、

2194 女をはなれてよめる　きのとものり
たきつせにうき草のねはとめつとも人のこころをいかがたのまん（四・雑の思）

以下、「人の心をいかがたのまむ」を下句に据えた連作四十首（2194～2233）が含まれる。同帖は万葉歌数も六帖中最少であることから、これもまた同帖の性格に起因するところが大きいものと思われる。

以上、六帖出典未詳歌に関わる基礎的諸問題についてかいつまんで述べてきたが、それに立脚しつつ次節では出典未詳歌の表現的特徴を探ってみたい。

三

六帖出典未詳歌の表現特性としてまず挙げられるのが、古今集歌との類似性である。すなわち、未詳歌の句表現が古今集歌のそれときわめて近しく、古今歌との影響関係を積極的に想定しうるケースである。むろん、万葉歌とも重なる表現や「あしひきの山下水」「東路の小夜の中山」などの類型表現はひとまず除外しなければならないが、それらを差し引いても共通あるいは類似の表現はきわめて多い。まずは次の例から挙げたい。

918 秋の夜の月のひかりし清ければはこねの山のうちさへぞてる（二・山）
秋の夜の月のひかりしあかければくらぶの山もこえぬべらなり（古今・秋上195・元方／六帖・一・秋月308・元方）

1052 おほぞらの月のひかりしきよければ影見し水ぞまづこほりける（古今・冬316・不知）
いとはやもなきぬるかりかこがのもりきにはふつたも紅葉あへなくに（二・森）
いとはやもなきぬるかりか白露のいろどる木木ももみぢあへなくに（古今・秋上209・不知／六帖・六・4355）
＊左注に「又は秋はきのしたはもいまたもみちあへなくに」（関戸本・清輔本他）

2576 あしびきの山下とほるつきかげにあかずも人にあひみつるかな（五・初めて会へる）
さ夜ふけてあまのと渡る月影にあかずも君をあひ見つるかな（古今・恋三648・不知／六帖・五・初めて会へる2585）

4474 あかつきのしぎのはねがきもはがきかきあつめてぞわびしかりける（六・鴨）
暁のしぎのはねがきもはがき君がこぬ夜は我ぞかずかく（古今・恋五761・不知／六帖・六・鴨4471）

3816 きみがをるやへ山ぶきの花かつみかつみる人ぞこひしかりける（六・花かつみ）
みちのくのあさかのぬまの花かつみかつ見る人にこひやわたらむ（古今・恋四677・不知／六帖・六・花かつみ3817）

これらはいずれも三句の表現が合致あるいは類似している例であ

るが、古今集歌については読人知らず詠が多いことから、同様に六帖詠も万葉以来の伝誦古歌ではないかと考えたくなる。とくに、六帖1052の場合、古今集では「いとはやもなきぬるかりか秋萩の下葉もいまだもみぢあへなくに」という異文も伝わり、さらに六帖には、

3270 いとはやもなきぬるかりかふるころもあらためきせんいももあらなくに（五・ころも）

という類歌も見出される点、これらは元来同一歌でありながら伝誦の過程で生成された派生的な本文であるという見方もできようかと思われる。たしかに、古今集読人知らず詠と表現的に近しい歌は、次掲のごとく多い。

596 ほととぎすいくこゑなきししづくにかあやめもしらぬぬれぎぬはきし（一・雫）

郭公なくやさ月のあやめぐさあやめもしらぬこひもするかな（古今・恋一469・不知）

825 ありと見てたのむぞかたきかげろふのいつともしらぬ身とはしるしる（一・かげろふ）

ありと見てたのむぞかたきうつせみの世をばなしとや思ひなしてむ（古今・物名「をばな」443・不知）

1456 しのぶれどくるしきものをあしひきのやましたみづのつねにながれて（三・水）

忍ぶれば苦しきものを人しれず思ふてふ事誰にかたらむ（古今・恋一519・不知／六帖・五・人知れぬ2675）

1796 しほがまのまへにうきたるうきしまのうきておもひのあるよなりけり（三・しほがま・山口女郎）

あさなあさな立つ河霧のそらにのみうきて思ひのある世なりけり（古今・恋一513・不知／六帖・一・霧639）

1835 いそなるるあまのつりなはうちはへてくるしくもあるかいもにあはずて（三・釣）

いせのうみのあまのつりなは打ちはへてくるしとのみや思ひ渡らむ（古今・恋一510・不知）

2097 よのなかのうきもつらきもかなしきもたれにいへとか人のつれなき（四・恨）

世中のうきもつらきもつげなくにまづしる物はなみだなりけり（古今・雑下941・不知）

【参考】

世の中のうきもつらきもしのぶれば思ひしらずと人や見るらん（拾遺・恋五933・不知）

よの中のうきもつらきもとりすべてしらするきみや人をうらむる（元良親王集35・女）

なみだゞにかゝるわが身のなかりせばうきもつらきもたれにいはまし（同89・宮）

2562 なげきつつよをやつくさんたかさごのまつのときはに心はありとも（五・年へていふ・貫之）

かくしつつ世をやつくさむ高砂のをのへにたてる松ならなくに（古今・雑上908・不知）

【参考】

ひとりしてよをしつくせば高砂の松のときはもかひなかりけり（貫之集Ⅰ・五・647）

3785 まめなれどよき名もたたずかるかやのいざみだれなんしどろもどろに（六・刈萱）

まめなれどなにぞはよけくかるかやのみだれてあれどあしけ

くもなし（古今・誹諧歌1052・不知）

しかし、こうした六帖詠がすべて古今集以前に詠まれた古歌であるとはいい難かろう。たとえば、六帖2097は、恋人が冷淡ゆえ世の中の憂さや辛さや悲しさを語る人がいないと嘆いた一首だが、これと表現・発想を親しくする歌は、他にも【参考】に掲げたような歌作例を見いだしうる。ことに元良親王集所載の二首については、上二句はもとより「知る」「涙」の語が上掲古今941と合致しており、古今歌を念頭に置いての詠とみてよかろう。六帖歌との先後関係は不明というほかないが、表現面からみても六帖歌の詠作時期が古今歌を遡るとは考えにくく、むしろ元良集所載歌と同様、古今集以後の詠ではないかと推察される。また、六帖2562は【参考】に掲げた貫之歌とも類似を見せており、これと古今歌の表現を切り貼りして一首をものしたかのようである。ちなみに、当該歌は「つらゆき」の作者名表記を有するが、田邊俊一郎氏が指摘されるように六帖における貫之の作者名表記は「正確であることの割合が」「高率である」[10]点を考慮すれば、当該歌の作者が貫之である可能性も否定できない。あるいは当該六帖歌を貫之歌の異伝とみることもできようが、田中登氏[11]はこれを出典未詳歌として扱っておられ、本論もその認定に従うこととする。いずれにせよ、六帖出典未詳歌の中には、古今集時代あるいはそれ以降の比較的新しい歌も含まれているという推察はあながち不当ではないものと考える。

貫之歌との類似について若干ふれたが、古今集歌との表現的関連は、読人知らず歌のみならず撰者時代の歌においても顕著である。次に該当例を挙げてみたい。

272 雲もなくなぎたるあさのてるひにも思はれまさるわれやなにな
り（一・てる日）

640 雲もなくなぎたるあさの我なれやいとはれてのみ世をばへぬらむ（古今・恋五753・友則／六帖・四・恨2114）

ちどりなくさほの川霧たちかへりつれなき人をこひわたるかな（六帖・一・霧640・躬恒或本）

1576 千鳥なくさほの河ぎりたちぬらし山のこのはも色まさりゆく（古今・賀361／六帖・六・槇4285・忠岑）

いもせ川なびくたまものみがくれてわれはこふとも人はしらじな（三・川）

1886 河のせになびくたまものみがくれて人にしられぬこひもするかな（古今・恋二565・友則／六帖・五・人しれぬ2664）

しほがまのうらとはなしにきみこふるけぶりたえずもなりにけるかな（三・われから）

2310 君まさで煙たえにしほがまの浦さびしくも見え渡るかな（古今・哀傷852・貫之）

しろたへのころもかたしきかすがのにわかなつみしもたがためにぞは（四・若菜）

2527 かすがののわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ（古今・春上22・貫之／六帖・一・若菜46）

おほぞらにわれをおもはむ人もがなはかなきことはのちにさだめん（五・知らぬ人）

2801 わがごとく我をおもはむ人もがなさてもやうきと世を心みむ（古今・恋五750・躬恒／六帖・四・恨2102）

あくるまであるだにあかぬ夏のよをまだよひながらこしがわびしさ（五・宵の間）

夏の夜はまだよひながらあけぬるを雲のいづこに月やどるら

む（古今・夏166・深養父）

3030 ひとりしてものをおもへばすべをなみゆけどもいもにあふときもなし（五・来れどあはず・人麿）

ひとりして物をおもへば秋のよのいなばのそよといふ人のなき（古今・恋二584・躬恒）

3549 はるくればのべのまにまにおひしげるちくさに物をおもふ比かな（六・春草）

秋ののにみだれてさける花の色のちくさに物を思ふころかな（古今・恋二583・貫之）

右のうち六帖3030は第三句に「すべをなみ」を据えた万葉調の歌で、古今集仮名序のいう「万葉集に入らぬ古き歌」である可能性も否定できない。が、他は詠風からして上掲古今集歌に依拠しつつ詠まれた同時代あるいはそれ以降の歌とみられよう。ことに272は明らかに古今歌の「厭はれてのみ」を「思はれまさる」に置き換えて詠まれたものと目され、また2801も古今歌の表現を借りつつ、「まだ宵ながら」訪れた男を厭って皮肉たっぷりに詠まれた一首と思しい。こうした歌作姿勢は、片桐洋一氏[12]が指摘された後撰集歌の特質たるハーフメイド的和歌作法と相通ずるものがあると思われるが、その点については後に改めてふれることとしたい。

如上の考察より、六帖出典未詳歌と古今集所載歌との表現的関連性がおおむね看取されたかと思う。むろん、上述したように古今集歌の異伝もしくは訛伝の可能性についても留意しなければならないが、その点をひとまず措いても、出典未詳歌における顕著な表現特性として位置づけることができよう。また、該歌の詠作時期についても、これまで「古歌」という漠とした位置づけに終始していたものが、古今集歌との比較によってある程度の見通しが立てられるまでに至った点もあわせて指摘される。とくに、古今集撰者時代の歌との表現的類似は、出典未詳歌の詠作時期を推定する上で一つの傍証となり得るものとも思われるが、その傾向はたとえば貫之・躬恒ら古今集撰者の家集所載歌においても顕著に見受けられるのである。参考までにその一部を挙げてみたい。

153 一年に一よばかりを七夕のいつとあふとか名をばたつらん（一・七日の夜・貫之）

一とせに一夜と思へどたなばたのあひみん秋の限なきかな（貫之集Ⅰ395）

一とせにひとよと思へど七夕はふたりともなき妻にざりける（同407）

【参考】

一年に一夜のみあふたなばたを立なかくしそあまのかはぎり（清正集26）

ひとゝせにひとよをこめてたなばたのあきはこよひの月日ならぬか（元ヲ真集10）

1559 ゆふだすきかけても人をたのまねどなみだはかもの川にこそたて（三・川／同1591に重出）

ゆふだすきかけても人を思はねどうづきもけふもまだあかぬ哉（貫之集Ⅰ・三・338）

2851 わかなつむ春のたよりにかすがのの花の心はしりにしものを（五・みちのたより・貫之）

わかなつむ春のたよりに年ふればおいつむ身こそ佗しかりけ

4240 れ（貫之集Ⅰ・三・280／六帖・二・翁140）
みなそこにかげをうつしてこむらさきそめてかけたるきしの藤なみ（六・藤）
水底に影をうつして藤の花千世まつとこそ匂ふべらなれ（貫之集Ⅰ・六・677）
88 五月雨に苗ひきうるたごよりも人をこひぢに我ぞぬれぬる（一・五月）
五月雨にみだれそめにし我なれば人を恋ぢにぬれぬ日ぞなき（躬恒集Ⅰ187／六帖・一・五月90・躬恒）
187 なが月のここぬかごとに百敷のやそうぢ人のわかゆてふきく（一・九日）
なが月のこゝぬかごとにつむきくのはなもかひなくおひにけるかな（躬恒集Ⅰ261／六帖・一・九日188・法皇）
958 こひこひてあはずなりなば山川の人もわたらぬせとやなりなん（二・山川）
こひ〳〵てあはずなりなばあしたづのみちくるしほにぬれやわたらむ（躬恒集Ⅰ323）
1047 人しれぬおもひするがの国にこそ身を木がらしのもりはありけれ（二・森）
ひとしれぬおもひするがのふじのねのもえつゝのみやこひわたるべき（躬恒集Ⅰ311）

むろん、これらの出典未詳歌の中には家集詠に先行する歌もあろうが、少なくとも貫之詠と類似を見せる前半四首については、同時代あるいはそれ以降の歌作とみておいてよいものと思われる。とくに、六帖153は「つらゆき」の作者名表記を有している点、貫之集所載歌と同様貫之自身の詠である可能性もある。【参考】に掲げた清正・元真両詠はおそらく貫之歌に依拠しつつ詠まれたものと推察される。六帖出典未詳歌は十世紀初頭から半ばにかけての詠で、現存の家集から漏れてしまったような歌作が比較的多いのではなかろうか。その点をさらに裏付けるべく、次節では後撰集所載歌との関係について分析を行ってみたい。

四

六帖出典未詳歌と後撰集所載歌との表現的関連は、前節でみた古今集歌とのそれに劣らず顕著である。以下にその用例を一部挙げる。

211 ちはやぶる神無月こそかなしけれたれをこふとか常に時雨るる（一・神無月）
ちはやぶる神な月こそかなしけれわが身時雨にふりぬと思へば（後撰・冬469・不知）
770 こほりこそいまはすらしもたきつせのたぎつおとさへ音はたえぬや（一・氷）
氷こそ今はすらしもみよしのの山のたきつせこゑもきこえず（後撰・冬477・不知）
887 かたときもみねばこひしきおほえ山なげきこえする人はよきかは（二・山）
かた時も見ねばこひしき君をおきてあやしやいくよほかにねぬらん（後撰・恋二677・有文）

あふごなき身とはしるしる恋すとて歎こりつむ人はよきかは
（後撰・恋六1043・不知）

【参考】

なげきのみおほえのやまはちかけれどいまひとさかをこえぞかねつる（躬恒集Ⅳ56）

1552 人しれずぬれにし袖のかわかぬはあぶくま川の水にやあるらん
（三・川）

君こふとぬれにし袖のかわかぬは思ひの外にあればなりけり
（後撰・恋一562・不知）

1570 いのりつつたのみぞわたるはつせ川うれしきせにもながれあふやと（三・川）

心みに猶おりたたむなみだがはうれしきせにも流れあふやと
（後撰・恋二612・敏仲）

2149 あはれてふことよわ（ママ）ひかにあるものを人にしらるるなみだなりけり（四・雑の思）

こひしきも思ひこめつつあるものを人にしらるる涙なになり
（後撰・恋三722・中興）

2887 こともつきほどはなけれどかたときもとはぬはつらきものにざりける（五・おどろかす）

4404 わがやどにきゐるうぐひすはねよわみとはぬはつらき物にぞ有りける（六・鶯）

わすれねといひしにかなふ君なれどとはぬはつらき物にぞ有りける（後撰・恋五928・本院の蔵／六帖・四・恨2119）

3295 わがためにうすきこころのたたれせば夏のころもにたたましものを（五・夏衣）

夏衣身にはなるともわがためにうすき心はかけずもあらなん
（後撰・恋六1019・不知）

3320 にくからぬひとのきすなるぬれぎぬはいとひがたくもおもほゆるかな（五・ぬれぎぬ）

にくからぬ人のきせけんぬれぎぬは思ひにあへず今かわきなん（後撰・恋五956・中将内侍）

3992 秋ののつゆにぬれつつたれくとか人まつむしのここら鳴くらん（六・松虫・貫之三首）

秋ののにきやどる人もおもほえずたれを松虫ここらなくらん
（後撰・秋上260・［貫之］／六帖・六・松虫3994・［貫之三首］）

【参考】

もみぢばのちりてつもれるわがやどに誰を松虫ここらなくらむ（古今・秋上203・不知）

あきののに人松虫のこゑすなり我かとゆきていざとぶらはむ
（古今集・秋上202・不知）

右に挙げた後撰集歌の作者をみると、後撰469・477・1043・562・1019は読人知らず詠、他は中興詠の722と貫之詠の260を除き勅撰集では後撰集のみに登場する当代歌人の詠である。読人知らず詠や所謂素人歌人詠が多いという傾向は、掲出歌に限らず類似歌全般にわたっており、後撰集読人知らず詠の大半が当代の和歌で占められているとする片桐氏の御指摘[13]に倣えば、六帖出典未詳歌の表現は後撰集時代の素人歌人詠とも親しさを見せているということになる。

また、後撰集歌との先後関係についてであるが、片桐氏がいわれるように「対象に応じて整えられた半製品を適当に組み合わせて一首の和歌にす」[14]るというハーフメイド的和歌作法が後撰集的表現の特質であるとすれば、後撰歌の多くは当時すでに流布していた六帖

歌の表現を借用したものとみておくのが穏当であろう。ただし、六帖3992の場合は【参考】に掲げた古今歌からの表現摂取を想定したほうが理解しやすい。おそらく後撰260も同断の作法によるものであろうが、六帖歌にみる作者名表記「つらゆき三首」に留意すれば、六帖歌・後撰歌はともに貫之詠である可能性も否定できない。また、六帖887は後撰集677と上二句を同じくしているが、〈嘆き―投げ木〉〈良き―斧〉の掛詞を含む下二句の表現は後撰1043とも類似する。さらに「大江山」の「おほ」には【参考】掲出の躬恒歌と同じく「(嘆きが)多い」の意を響かせているが、こうした表現特性は当該歌が後撰歌・躬恒歌の影響下に成ったことを示唆していよう。六帖出典未詳歌は決して古歌ばかりではなく、後撰集所載歌の表現を借用した比較的新しい歌をも含んでいるとみたい。この推察に蓋然性が認められるとすれば、たとえば順・好忠ら後撰時代の歌人詠に少なからず影響を与えたと思しい、

1015 いかだおろすそま山河のみなれざをさしてくれどもあはぬ君かな(二・杣)

いかだおろすあとのはや水せきとめてくれゆく秋を見るよしもかな(好忠集Ⅰ・毎月集・九月終275)

いかだおろすそまやまがはもみづすめりちとせをさしてゆけばなりけり(元輔集Ⅲ119・永観二年太政大臣家屏風歌)

いかだおろしあけくれくだす大井河みなれぞしぬるよそのひとさへ(能宣集Ⅰ231・屏風歌)

1457 夏の野のくさしたがくれ行く水のたえぬ心ある我としらずや(三・水)

なつのゝのくさしたがくれおみなへしいろにいでねとしるくもあるかな(能宣集Ⅲ106)

3869 みな月のかはらにおもふやほたでのからしや人にあはぬこころは(六・蓼)

にはみればやほたでおひてあれにけりからくしてだに君がとはぬに(順集Ⅱ・天地の歌・夏19)

やをたでもかはらをみればをひにけりからしやわれも年をつみつゝ(好忠集Ⅰ・毎月集・四月中107)

4349 たづのたつさはべになみやさわぐらんあしのみぎはののどけからぬは(六・鶴)

たづのすむさはべのあしのしたねとけみぎはもえいづる春はきにけり(能宣集Ⅰ116・実頼七十賀屏風歌)

などの出典未詳歌も、実は現時点では作者を詳らかにし得ない当代歌人詠であったという見方もまた成り立つわけである。この問題については稿を改めて論じたいが、六帖出典未詳歌を扱う際には、それが後撰集時代の歌作である可能性にも十分留意すべきものと考える。

五

以上、本稿では古今和歌六帖所載の出典未詳歌について、古今集・後撰集所載歌との表現的関連を探ってきた。その結果、次のようなことが主たる結論として指摘される。

(1) 六帖出典未詳歌の表現は古今集歌のそれときわめて親しく、両者の間には緊密な影響関係が認められる。古今歌の異伝もしくは訛伝と思しき例も存するが、ほとんどは古今集歌に依拠しつつ詠まれた歌とみられる。したがって、該歌の詠作時期は古今集時代もしくはそれ以降である場合が比較的多いものと推察される。

(2) 右の現象は古今集撰者の家集とくに貫之集・躬恒集においてもほぼ同様に看取され、該歌と古今集時代和歌との緊密な表現的関連を裏づける結果となり得た。

(3) 如上の表現特性は後撰集歌の特質たるハーフメイド的和歌作法と相通ずるものがある。

(4) 六帖出典未詳歌の表現は後撰集歌、中でも素人歌人詠のそれとも親しいが、両者の関係については微妙で、①後撰歌が六帖歌の表現を摂取した場合、②逆に六帖歌が後撰歌の表現を摂取した場合、③両者の間に影響関係はなく偶然同一の先蹤詠に依拠した結果とみられる場合、など種々のケースが想定される。

(5) 以上より、六帖出典未詳歌は決して古歌ばかりではなく、前項②のように後撰集所載歌に依拠した当代の歌も少なからず含んでいる可能性がある。六帖出典未詳歌を扱う際には、その点に十分留意しておく必要がある。

なお、本来ならば万葉歌との関連についても言及すべきところであるが、本稿ではその余裕を持ち得なかった。他日を期したい。

注

(1) 「古今和歌六帖の歌語―データベース化によって見た歌語の位相―」(『歌ことばの歴史』平10　笠間書院所載)

(2) 「源順歌の表現―『古今和歌六帖』出典未詳歌との関連―」(『和歌文学研究』七六号　平10・6)

(3) 以下、和歌の引用は断りのない限り、勅撰集・私撰集は『新編国歌大観』、私家集は『私家集大成』に拠った。ただし私家集本文については私に清濁を施し、一部本文を改めた箇所がある。なお『万葉集』の歌番号は旧国歌大観番号を用いた。

(4) 田林義信編『校證古今歌六帖』(昭27・30、復刊　昭59　有精堂)の翻刻に拠る。

(5) 天保十四年刊本に拠る。

(6) 古今集異本歌については、滝沢貞夫氏『古今集総索引』(昭53　明治書院)、片桐洋一氏『古今和歌集全評釈　下』(平10　講談社)に拠った。なお異本歌数は先行歌集所載歌を除いたものである。六帖1873＝元永本・志香須賀文庫本954の次、2173＝志香須賀文庫本1060の次、3055＝前田家清輔本・志香須賀文庫本・基俊本・六条家本・永治本・寛親本・天理本・伏見宮本739の次、3488＝元永本1068の次、志香須賀文庫本・基俊本1022の次、3736＝静嘉堂文庫本・元永本・筋切・基俊本103の次。

(7) 六帖906＝素性集解題、868＝伊勢集Ⅰ381、1462＝同409、1533＝同402(実方集Ⅲ52)、1798＝伊勢集Ⅰ385、1879＝同388、1883＝同379、1888＝同380、2890＝同403

(8) 注4著書の頭注。

(9) 中西進氏『古今六帖の万葉歌』(昭39　武蔵野書院)の認定に拠る。ただし類似歌については除外した。

(10) 「『古今和歌六帖』本文攷―作者名表記論断章」(『中古文学』四〇号　昭62・11)

(11) 「古今六帖の貫之歌」(『平安文学研究』六三輯　昭55・1)

(12) 「後撰和歌集の表現」(『女子大文学国文篇』一六号　昭39・11、『古今和歌集以後』平12　笠間書院所載)。

(13) 注12に同じ。

(14) 注12に同じ。

〔付記〕本稿は信州平安文学研究会平成十三年六月例会（六月三十日　於　上田女子短期大学）における発表原稿に加筆補正を施したものである。席上ご教示を賜った諸先生方に心より御礼申し上げます。なお、本稿は平成十三年度上田女子短期大学研究助成費による研究成果の一部である。